

令和 2 年 4 月 7 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02358

研究課題名(和文) G.Mahlerの後期様式による漸進的和声課題集の作成

研究課題名(英文) Preparation of a collection of progressive harmonic tasks in the late style of G.Mahler

研究代表者

森川 孝太郎 (Morikawa, Kotaro)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：60444428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：これまで、Mahlerが作曲した『交響曲第10番』は、冒頭などにあらわれる和声付けがされていないヴィオラの旋律や203小節から208小節にあらわれる9つの異なる音による和声などから、しばしば調性が不明確である作品と指摘されてきたが、本研究により、冒頭などにあらわれるヴィオラの旋律に機能的和声による和声付けを行ったこと、9つの異なる音による和音について、和声分析によりその傾向を抽出したこと等から、機能的和声を敷衍して解釈することによって調性の中の機能を持つ和声としての説明が可能であることを示すことができた。なお、冒頭のヴィオラの旋律に和声付けを行ったのは、確認しうる限りでは国内外で初である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音楽は科学の要素を含みつつ科学そのものではないことから、根拠を求めることが難しい。確かに、音楽そのものを言語化することはできないが、音楽は漠然と作品が論じられる危険性を常にもっている。しかし、本研究は、漠然と調性が不明確であると指摘されてくるが多かったMahlerが作曲した『交響曲第10番』第1楽章について、ヴィオラの冒頭の旋律への和声付けをはじめとした楽曲分析により、機能的和声でもって説明することが可能であることを示した。ここに、本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)：Mahler's Symphony No. 10 often has unclear tonality due to the melody of the viola that is not harmonized at the beginning and the harmony of nine different sounds that appear in measures 203 to 208. It has been pointed out that this is a unique work.

In the present study, however, I used functional harmony to harmonize the viola's melody that appears at the beginning of the work, and I extracted the tendency to harmonize nine different notes in the first movement of "Symphony No. 10" through harmonic analysis. Therefore, the Symphony No. 10 composed by Mahler could be shown to be music with coordination, composed on the basis of functional harmony, by laying out and interpreting functional harmony. As far as I can confirm, this is the first time in Japan and abroad that a harmony was added to the viola melody at the beginning of the piece.

研究分野：作曲、音楽理論

キーワード：マラー 和声 楽曲分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 西洋音楽における機能和声の働きは、言語の習得と同じように「聞く・読む・書く」ことをしなければ習得できない。これらは、言語獲得における「聞く・読む・書く」のすべての行為を満たすことと同じであり、西洋音楽を学ぶ者にとって必須である機能และ声の働きを確実に身につけるものである。

(2) 和声学の習得は、作曲、音楽学、演奏など音楽内の様々な専門領域の如何を問わず、必須のものである。実際、国内だけを見ても和声関連の書籍は常に出版・増刷され続けている。そして、それが成立しているということは、音楽を専門的に学習する者だけではなく、趣味で音楽に触れる人たちも和声学など西洋音楽理論関係の専門的な書籍に興味を示しているといえる。つまり、それは、潜在的に音楽理論の専門知識を欲している人が相当多くいることをあらわしている。

(3) しかし、現在入手できる和声関連の書籍のほとんどは、和声についての概略的説明によるものがほとんどで、それらの知識が作曲や楽曲分析や演奏にどのように結びつくかを示すような類ではない。とりわけ、様式和声課題集は国内での出版はまだなく、国外においてもドイツ後期ロマン派の時代様式和声課題について、極めて少数である。

(4) そこで、本研究は、当初、音楽を学習する者が、これまで欠けていたドイツ後期ロマン派の和声語法による和声課題集を作成することを試み、極限まで拡大された調性音楽様式による創作や後期ロマン派音楽の根拠のある解釈に基づく演奏などの音楽活動に役立てることを目指した。

(5) しかし、研究を進めるうち、課題集作成にあたり、俯瞰的にドイツ後期ロマン派の和声の傾向の抽出することに相当の時間を要することが分かった。

(6) そのため、まず、ドイツ後期ロマン派音楽の中にあり、調性が不明確であるとしばしば指摘される Mahler の『交響曲第 10 番』第 1 楽章を和声分析することにより、その和声の傾向を抽出し、ドイツ後期ロマン派音楽の和声の極限について考察した。

(7) その成果を、将来的に Mahler の様式和声課題集作成の礎とする。

2. 研究の目的

本研究は、2 つの目的をもつ。

(1) 将来的に、Mahler の様式和声課題集を作成するにあたり、Mahler が最晩年に作曲に取り組み、未完成に終わった『交響曲第 10 番』より第 1 楽章アダージョの和声分析をすることを本研究の一つ目の目的とする。

(2) しばしば調性が不明確であると指摘されるこの作品の和声分析をし、その傾向を抽出することにより、ドイツ後期ロマン派に属する Mahler による様式和声課題集作成の基礎とすることを本研究の二つ目の目的とする。

3. 研究の方法

(1) 楽曲分析により楽式を提示し、区分を設け、区分ごとに和声分析を行った。区分ごとに和声分析を行うのは、便宜上のものである。

(2) また、楽式における時間的経過と和声の関連性について、楽曲構造の分析を併せて行うことにより、楽曲構造と和声の関連性を考察した。

4. 研究成果

(1) これまで、Mahler が作曲した『交響曲第 10 番』第 1 楽章は、冒頭などにあらわれる和声付けがされていないヴィオラの旋律や 203 小節から 208 小節にあらわれる 9 つの異なる音による和声などから、しばしば調性が不明確である作品と指摘されてきた。しかし、本研究において、冒頭などにあらわれるヴィオラの旋律に機能และ声による和声付けを行った。

(2) 冒頭などにあらわれるヴィオラの旋律に対する和声付けから、少なくともヴィオラの旋律は、調性による機能และ声で説明可能であることを示すことができた。

(3) 区分ごとに和声分析をすることにより、楽曲構造と和声の関連性について、Mahler 作曲『交響曲第 10 番』第 1 楽章では、時間の経過とともに、経過的和声や偶成和声が頻出する傾向を示すことができた。

(4) 和声分析により、Mahler 作曲『交響曲第 10 番』第 1 楽章では、同一声部で解決しない倚音や解決が引き延ばされる倚音などの非和声音を含む旋律を支える和声から、Mahler が本作において和音構成音の新たな可能性を模索する試みがされている推察をした。

(5) (4)の推察から、203 小節から 208 小節にあらわれる 9 つの異なる音による和音について、機能 and 声を敷衍して解釈することによって、調性の中の機能を持つ和声としての説明が可能であることを示すことができた。

(6) 区分ごとの和声分析により、Mahler 作曲『交響曲第 10 番』第 1 楽章では、展開部において、旋律が保調的であるときに和声が経過的、偶成的傾向を示すことを明らかにすることができた。

(7) (6)により、Mahler が晩年に考えていた調性のあり方について、機能 and 声の機能を薄めたときに旋律が調性を明らかにすることを模索していたことを推察し、今後の Mahler の調性、旋律、和声についての研究について可能性を見出すことができた。

なお、Mahler 作曲『交響曲第 10 番』第 1 楽章冒頭などにあらわれるヴィオラの旋律に対し、和声付けを行ったのは、確認しうる限りでは国内外で初である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 森川孝太郎	4. 巻 71
2. 論文標題 G.Mahler 『交響曲第10番』 第1楽章アダージョにみられる和声の傾向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 125 140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----